【280】

氏　名(本　籍)	古家信平(熊本県)
学位の種類	博　士(文　学)
学位記番号	博乙第 1,367 号
学位授与年月日	平成10年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	**台湾漢人社会における民間信仰の研究**

主　査	筑波大学教授	文学博士	平山和彦
副　査	筑波大学教授	文学博士	牛島　巌
副　査	筑波大学教授	文学博士	大濱徹也
副　査	神奈川大学教授	文学博士	宮田　登

論文の内容の要旨

著者は民間信仰を「教祖や教典あるいは祭神の名称などを既成宗教から借用しながら，それらとは別の伝統にしたがった世界観をもち，霊的存在との間に一定の関係を有し，地方的な職能者を中核として保持されている信仰」と規定する。そして，台湾における民間信仰の自律性につき，台湾の民俗語彙から抽出した「下願」「返願」，「請」「送」，「転」という3組の分析概念を用いて，台湾南部の漢人社会における神祭の構成，および儀礼空間に表出される人々と霊的世界の関係性，つまり神人関係並びに人々の世界観を考察したものである。この課題は，台湾漢人社会における民間信仰の自律性，およびそれが地域住民のアイデンティティーの核を成すものであることを実証することを試みたものである。本論文は，序章と終章を含めた8章と結語，および添付資料，写真，参考文献から構成されている。

序章「民間信仰の比較研究－課題と方法－」では，日本の植民地統治時代の台湾宗教調査および戦後の日本，アメリカ，台湾の研究者による調査等をふまえ，民間信仰ないし民俗宗教概念を考察し，その研究現況を問い質している。著者は，混迷する研究情況を克服する方途として，台湾および琉球を例にあげて史上さまざまな政治権力のもとで民間信仰は影響を受けながらも，それは表層の変化に止まり，基底部では人々の自己認識を支え続けたものとして把握しうることを指摘し，「下願」－人々の神に対する願いと約束－，「返願」－願いが成就したことに対する感謝と約束の実行－，「請」と「送」－神霊の送迎－，「転」－高位の神々に対する人々の願いを下位の神々ないし宗教的職能者が行う仲介－がもつ構造を解析することで，台湾の民間信仰がもつ固有性が位置づけられると指摘している。

第一章「台湾の歴史と民俗」では，先住民および中国大陸からの移住民の歴史を跡付け，双方とも文化的中国化の進展による自身の先祖との断絶という点では同じ経過を辿り，それが民間信仰の自律性の歴史的背景だとする。さらに寺廟の分布や政策による統廃合，宗教的職能者に関する統計資料等を考察し，著者のフィールドワークの経験から，それらが実態を正確には表していないこと，特に宗教的職能者については限界が著しいことを論じ，フィールドワークに基づく地域研究が必要なことを強調している。

第二章「都市における廟の祭礼と神人関係－鳳山宮の祈安慶成醮－」では，台南市内の廟・鳳山宮の沿革と，一連の神祭の実態をフィールドワークに基づき詳述している。ここでは霊的世界との交渉を仲介する轎仔や童乩の機能が「転」を表すこと，鬼に対する神兵の在り方に人々の世界観が窺われること，また道士の儀礼は神への

上奏を基本とする「転」にあること，一般信者の醮祭に対する第一目的は亡霊の処理にあり，道士は亡霊とその処理のため神々の降臨を「請」い，その後に「送」り返されること，醮祭の普及という儀礼においても道士により「下願」および「返願」が行われること等を明らかにしている。これら一連の祭祀には既成宗教から借用した儀礼要素が含まれるが，総体的には独自の祭祀体系が構成されていることを強調している。

第三章「村落社会における廟の祭礼と神人関係－長興宮の王爺醮祭－」では台南市の北方に位置する一農村の長興宮における醮祭の検討を課題としている。社会経済的な転変にも関わらず，ここでの醮祭もまた鳳山宮の事例と同様な構成を示す。すなわち道士は神祭にあたり，信者の祈願に応じて王爺を「請」い，王爺に信者の願いを「転」じ，その庇護を「下願」し，「返願」を行い，ついで神を「送」る。また，道士の儀礼空間は一般人とは隔離されているが，亡霊への儀礼に関しては一部に重複部分があり，ここに道教の伝統が民間信仰のうちに組み込まれている事実を指摘する。

第四章「民家の儀礼に見る神人関係－拝天公－」では，台南県下の一農家で法師が行った天公に対する神祭を扱う。拝天公は年中行事や通過儀礼の一環として行われるが，これは後者に属する儀礼である。すなわち母親の長男の妊娠に際し「下願」が，長男の結婚式に際し「返願」が行われる。「請」は結婚式の前夜にあり，その後に「送」がなされる。そして，人々は廟の神々を通し（「転」），上界の神々に「請」うことができるという信仰と世界観の存在を祭壇構成や疏文の内容から考察し，地方的な宗教的職能者である法師を核として，人々の間にそうした世界観が保持されていると結論づける。

第五章「王法師の生活史と儀礼」では，台湾南部の法師からの聞き書きによるライフヒストリーが考察される。この法師は農家に生まれ，10代後半から宗教に関心を持ち，複数の法師に弟子入りした後，20歳で独立した。田植えなどの賃労働をしながら培った人脈と土地勘によって広がった信者が，法師の私神壇との関わり方によって３つに分類され，儀礼に用いるさまざまな法具や祭壇の構成から，道教以外の系統を引くものがあることを指摘する。従来，法師の儀礼は個人レベルの小法に限られているとされていたが，地域社会との密接な関連を有するものがあることも明らかにした。

第六章「法師の座禁儀礼からみた神人関係」では，一主婦が童乩の資格を得るに当たって行われた座禁の終了時の儀礼が対象とされる。座禁とは童乩に指名された人が49日間外界との接触を断つ，いわば参籠に当たる。一連の儀礼を司るのは第五章の法師である。著者はこの儀礼の観察により，やはり前述の３要素を見いだす。さらに，法具，神咒，指法，咒および法師の所作を観察して，実態を明らかにし，それらが相互に関連する様相に考察を加える。また，儀礼における法師の位置づけ，および道教における諸教脈の混淆的存在についても論述される。

終章「琉球のウトゥーシの概念」では，著者の今後の課題について言及している。すなわち，火の神との関連で折口信夫が重視したウトゥーシという遥拝儀礼は，ノロを神と見做し，ノロを通じてさらに上位の神に願いを「転」じてもらう意味をもつものとすれば，台湾の「転」の概念に相当するのではないかとの仮説を提示する。

「結語」で，これまで述べてきた問題を整理，確認した上で，民間信仰を従来のように既成宗教と対立的に認識するのではなく，地域において独自の体系をもつ自律的なものとして捉えられること，仮に儀礼や神像，法具，衣裳等に既成宗教の要素が見られても，それらは職能者の立場を強化するために既存の儀礼を借用したものであると位置づけられること。また，鬼，神，祖先などを現地の人々がどのように認識しているかは，霊的世界の内実を窺ううえで重要であるが，彼らの間での共通認識が極めて乏しいため，今後の課題にしたことなどにふれている。

審査の結果の要旨

本論文は，民間信仰を地域社会において一定の体系を成す自律したものとして把握し，かかる観点から台湾南

部の民間信仰における神祭と，そこに見られる人々と霊的世界の関係性，つまり神人関係を３組の分析概念（「下願」「返願」，「請」「送」，「転」）を用いて考察し，儀礼空間の態様を通して宗教的職能者と依頼者間における神観念の異同の析出を試みたものである。本論文の特筆すべき成果は，①特定の宗教にも習合面にも囚われず，地域社会における自律性に着目した著者の民間信仰概念がユニークであること，②神人関係に関わる３組の分析概念を設定することにより，台湾の神祭が精緻に説得力をもって解明されたこと，③これらの分析概念を使用することにより，今後の台湾，琉球，日本本土の民間信仰の比較にあたっての有力な視点を提示していること，④台湾南部の民間信仰の世界につき，新たな手法を導入した著者の長年月にわたるフィールドワークと，新たな工夫が見られる記述方法により，その実態がより綿密に浮き彫りにされたこと，⑤詳細な聞き書きによって，一法師のライフヒストリーが明らかとなり，文献資料では掴みがたい入信の過程や儀礼の内容が明瞭に把握されたこと，等である。

しかし，問題がないわけではない。上記の分析概念は特定の宗教に拘泥しない民間信仰把握にはそれなりの利点があるものの，道教とか仏教などの伝統的宗教世界にどこまで適用し得るかがいまだ十分に検討されていないこと，媽祖信仰への目配りがされていないこと，等である。

本論文にはこれらの残された問題があるものの，未だ調査・研究の両面において不十分であった台湾の民間信仰について，綿密な実地調査と文献の双方から考察したモノグラフを提示した研究として，学界へ貢献することは大であると認められる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。